



大東亜戦争における日本の必勝戦略とは何か、
そして、なぜその戦略は実現できなかったのか。

「対米英蘭蔵戦争終末促進に関する腹案」を基に
徹底検証した、目からウロコの一冊！



私の目を開いてくれたのは、
茂木さんが英語で発信する、
膨大な量の“史実”であった。

——ヘンリー・S・ストークス
(元[ニューヨーク・タイムズ]東京支局長)

大東亜戦争は
「無謀な戦争」では
なかつた！

茂木弘道

史実を世界に発信する会
ハート出版

大東亜戦争 日本は「勝利の方程式」を持つ持っていた！

史実を世界に発信する会
ハート出版



ISBN978-4-8024-0071-8
C0021 ¥1500E

定価：本体 1500円 +税

ハート出版



私は、「勝てる戦略を日本は持っていた」と言っているのです。

それは、驚くなれ、開戦直前の昭和16年(1941年)11月15日の大本営政府連絡会議で、正式に採択されていたのです。

「対米英蘭蔵戦争終末促進に関する腹案」がそれです。

この戦略に沿った戦いをしていけば、日本は少なくとも負けることはなかったと言えます。そういうことをご説明しようというのが、本書の狙いです。

——著者「はじめに」より

はじめに

いま私が「大東亜戦争に勝てる戦略を日本が持っていた」などと言うと、何をバカ言つてんだ、また例のタラレバの話かい、と思う人が多いのではないでしようか。そして、真珠湾攻撃で石油施設を破壊しておけばよかつた、だとか、ミッドウェー作戦で敵空母発見のあと、兵装転換などせずに、山口多聞^{たもん}第2航空戦隊長の具申どおり「直ちに発進」していたら魚雷でなくても十分戦えだし、あんな被害を受けないですからんだとか言いたのかい、と思われる方も多いかもしません。

確かに、真珠湾で第3次攻撃を行い、敵の石油施設を破壊していたら、ハワイのアメリカ海軍は数ヶ月間は機能不全、とても日本に対する攻撃などすることができなかつたでしょう。ミッドウェーでも、もし山口多聞少将の具申を南雲司令官が採用して、直ちに発

艦して来襲する米航空隊に立ち向かっていたら、日本の空母4隻が撃沈されるなどということは起こらなかつたでしよう。

ほかにも、こうしたタラレバの話はたくさんあります。

昭和17年8月7日、ガダルカナルに海軍が最新鋭の航空基地を完成したその瞬間を狙つて、アメリカ第1海兵師団が強襲上陸して、これを奪つてしましました。まず、なんで防御部隊をつけていなかつたのだと言いたくなります。また、なんでもんな、攻勢終末点をはるかに越えるようなところに、拠点基地を作らなければいけなかつたのだ、とも言いたくなります。

そして、この来襲米軍に対する反撃作戦として行われたのが8月7日、三川軍一司令官指揮する第8艦隊による、敵輸送船団のガダルカナルへの物資補給阻止のための、第1次ソロモン作戦でした。日本軍は輸送船団を護衛する米艦隊と激戦を交え、敵主力の重巡を4隻撃沈、1隻撃破、味方は損害ほとんどなしの大戦果を挙げたのですが、何を血迷つたのか、本来の目的である敵輸送船攻撃を行わずに引き揚げたため、アメリカ軍はたっぷりと必要な武器弾薬、食料をガダルカナルに陸揚げしたのでした。私が本気でタラレバを言

いたくなるのは、このときの三川司令官のとんでもない判断ですね。

あるいは、昭和19年10月13日のレイテ島決戦もその一つです。小沢司令官が空母部隊を囲にしてレイテ付近の敵航空部隊をつり出すことに成功しました。栗田中将率いる第1遊撃部隊は、戦艦武藏は失いますが、戦艦大和は辛くも敵の攻撃をしのぎ、戦艦4、重巡2、軽巡2、駆逐艦8とともにレイテ湾の入り口に達しました。湾の奥にはマッカーサー軍の大輸送船団がいました。しかも、その護衛戦力はスプレイグの護衛空母軍と駆逐艦隊のみでした。護衛空母の搭載機は戦闘機が主体で、戦艦に立ち向かう力はありません。

つまり、レイテ湾に結集したアメリカ軍上陸部隊と物資輸送船を壊滅させる絶好の機会でした。アメリカ軍が壊滅した際には、マッカーサーも無事ではいなかつたでしょう。しかし、この好機に栗田艦隊は突入をためらい、謎の反転をしてしまいます。どうして突っ込まなかつたのだ、と誰でも机を叩きたくなります。

こういう例は、探せばいくらでもあります。しかし、いくらこれらのタラレバを重ねていつて、すべてが日本の勝利に終わつたとしても、日本の最終的勝利の可能性はほとんどない、と私は思っています。

それはそうでしょう。G.N.Pで言えば、少なくとも当時、日本の10倍はあるアメリカです。

長期戦になつたら、この生産力、経済力の差が効いてきます。局部的にいくら目覚ましい戦果を挙げても、日本軍が実際に戦つていた前方決戦的なやり方では、とても「勝つ」などという見込みが出てくるとは思えません。

ではなぜ、冒頭で言つたような「勝てる戦略があつた」などと言つのか？　いい加減なことを言うな！　と詰問されるでしょう。

お答えします。私は、「勝てる戦略を日本は持つていた」と言つてゐるのです。

要は「戦略」です。経済力こそが、近代戦においては戦力の根本であり、抗戦力は基本的にこれはこれが決定します。しかし、考えてみてください。1国対1国の戦いでしたら、この、抗戦力が圧倒的に不利な状況を覆すというのは極めて難しいことでしょう。しかし、世界中の国がかかわる戦争となると、単純に戦力を比較しただけでは、その勝敗を判定することはできないのです。このとき、戦力を戦力たらしめるための、多国間の「輸送」の問題が、大きな要素として浮かび上がってきます。要するに、相手側の戦力が戦力になるのを防ぐ、「輸送線」「補給線」の遮断です。

結局のところ、敵の重要な輸送線＝補給線の遮断を最大限に織り込んだ戦略のみが、日本が勝てる戦略ということになると考えます。そして、実は、その戦略が日本にはあつたのです。それは天才戦略家の、たとえば石原莞爾(いしはら かんじ)がひそかに考えていたとかいうことではなく、驚くなれ、開戦直前の昭和16年（1941年）11月15日の大本営政府連絡会議で正式に採択されていたのです。「対米英蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」がそれです。

この「腹案」は現在の戦史では軽く見られ、そこに途方もなく巨大な戦略が秘められていたということは、すっかり忘れられていますが、私はここで、その秘められた戦略を明らかにしようとしているのです。

この戦略に沿つた戦いをしていけば、日本は少なくとも負けることはなかつたと言えます。本来の戦争目的を達成する形での終戦に持つていけたと言えるのです。そういうことをご説明しようというのが、本書の狙いです。

そして、実際的なシミュレーションでこれを実証します。すなわち当時の日本の戦力で可能である作戦を、この「対米英蘭蔵戦争終末促進に関する腹案」に沿つた形で行つたらどうなつたかを実証します。

さらに、現実的に実際に立てられていた作戦を、基本戦略から外れた、言わば外道の作戦を「排して」実行していたらどうなつたのか、ということで実証していくと思います。

その上で、ではなぜこの優れた戦略が実行されなかつたのか、その理由についても、で
きるだけ検討してみたいと思います。それが、あの戦争を正しく振り返り、将来に生きる
あの戦争の反省になると思っています。

平成30年11月

茂木弘道

もくじ

はじめに（英文版むけ）

あの戦争で「日本が勝利の方程式」を持つていた、などというと、未だにそんな妄想を抱いている人間が存在しているのか、と呆れてしまう人がほとんどかもしれません。少なくとも、欧米の人々の大半はそうでしょう。

ウイリアムズ大学のジェームズ・B・ウッド教授は、「太平洋戦争」は必ずしも無謀な戦争ではなかつたところの著書を *Japanese Military Strategy in the Pacific War; Was Defeat Inevitable?* (Rawman & Littlefield Publishers Inc., 2007) というタイトルで出しておますが、これは欧米、特にアメリカでは非常に珍しい考え方でしょう。大半の欧米人はウッド教授が、同書の序文で書いているように考えているでしょう。

「日本は、なぜアメリカを相手に戦うよつたバカげた考えを持ったのか」「GNPがイタリアやカナダ程度の国が、戦争に勝てるとなぜ思ったのか」「封建的武士道や文化、天皇崇拜、人種的優越意識を持つ一方で、近隣国への同情や尊敬を全く持ち合わせないような国かい、敗戦以外の何を期待できるのか」

これらの意味するところはつまり、日本を開戦に導いた責任ある人々は無知であり、無分別であり、あるいはその両方であつて、同時に、生来、邪悪な人々である。それはとりもなおさず、すべての点で日本は近代性の勝者というべきアメリカの全く正反対存在であるといふことである。(16^{ページ})

しかし、こんな知的に愚かで遅れた日本が、敗戦によって徹底的に破壊され、廃墟に等しい状況から、たつた23年後には GNP がアメリカに次ぐ世界第2位に復興するなどということがありうるでしょうか？また、開戦前の日米の海軍力を比べてみると、アメリカは東西両洋に戦力配置をしなければならぬために、日本の戦力はアメリカ太平洋軍をかなり上回つていたことをこれらの方々はご存じなのでしょうか？本文で詳しく紹介しますが、空母は、日本は10隻持つていましたが、アメリカは2隻です。両洋合わせても7隻にすぎません。無知で、無分別な日本といいますが、この言葉は、自分に返つてくることになりませんか？

ウッド教授によると、第二次世界大戦後50周年となる年に書かれたすべての本の中でただ一冊だけが、この戦争について決定論的な解釈に対し明白な挑戦をしているといいます。『なぜ連合軍は勝つたのか』(一九九五年) です。著者のリチャード・オーバリーが次のように書いています。

連合国はなぜ第二次世界大戦に勝ったのか。これは、とても単刀直入な質問であり、当然明白な答えがあると我々は考える。実際、このような質問はほとんど発せられることがない。連合国軍の勝利は当然のものと真名されている。彼らの大義は、明らかに正当ではなかつたか。様々な危険性にもかかわらず、連合国の強大な兵力の侵攻は無敵ではなかつたか。連合国軍の勝利に関する説明は、決定論的要素を色濃く反映している。私たちはその戦争の縹緥を十分に知っているので、もしかしたら、他の結果がえたかも知れない、という落ち着きのない可能性については考えようとはしない。連合国はなぜ勝つたのかを問うことは、もしかしたら、敗れていたかも知れないと仮定することであり、あるいはまた、完全な勝利とは言えない結果を受け入れていたかも知れないと想定することでもあるだろう。しかし、実際これらの可能性はかなりあり得たのである。連合国軍の成功について、運命づけられたものは、何もなかつたのだ。（18、19ページ）

ウッド教授は、これと同様な考え方に基づき、日本が何をなしえたのか、しかし実行しなかつたのかについて言及していきます。もし日本が別の戦争、それは実際、彼らの手の届く範囲内にあつたはずの戦争を戦っていたならば、歴史の道がたどり着いていたであろう世界について考察していきます。

これは非常に有益で参考になる考察を含んでいます。これらを参考にしつつも、本書はさらに進んで、そもそも「日本は勝利の方程式」を持つていたのに、そこから外れた戦いをしてしまつた。ではなぜそうなつてしまつたのか、ということを追求していきます。

真珠湾攻撃の3週間前の11月15日に大本営政府連絡会議が開かれ、そこで「対米英蘭蔣戦争終結促進に關する腹案」と題する、戦争のグランドデザインが決定されました。私はこれを「勝利の方程式」と考えております。その説明、そして実際的なシミュレーションによつてその証明を行つてきます。このグランドデザインの要旨は、冒頭の方針一に示されています。

速やかに極東における米英蘭の根拠地を覆滅して、自存自衛を確立すると共に、さらに積極措置により、蔣政権の屈服を促進し、独伊と提携してまづ、英の屈服を図り、米の継戦意思を喪失せしむるに勉む。

東南アジア資源地帯を抑えた後は、インド洋に向かい、オーストラリア、NZ、インドとイギリスの補給路切断を行い、イギリスを追い詰めるという作戦です。アメリカに対しても、太平洋という日本にとっての天然の武器を活用して、要領1、「凡有手段を尽くして適時米海軍を誘致してこれを擊滅するに勉

む。」の作戦をとることにしていました。遠路やつてくる米軍を待ち構えてたたくという方針です。実際には、真珠湾攻撃というこの方針を外れた邪道に踏み込んでいきました。

なぜそうなつてしまつたかについては、第4章で詳しく分析していきます。本来の作戦——実際に陸軍2個師団、海軍の主力を動員してイギリス東洋艦隊を撃滅してセイロン島を占拠する「第11号作戦」が作成され、昭和17年7月には発動寸前まで行っていました。このころチャーチルは、「今、日本がセイロン島と東部インドさ、さらに西部インドに前進してくれば対抗できない。蒋介石支援ルート、ペルシア湾経由の石油輸送ルートやソ連支援ルートが遮断される」と悲鳴を上げています。（4月7日、および15日付ルーズベルト宛書簡）

「勝利の方程式」は決して誇大妄想でもなんでもなく、現実的な可能性であったということです。ぜひ詳細をご覧ください。

令和元年6月21日 茂木弘道

第1章 日本は侵略戦争をしたのか

017

- 1 1929年の大恐慌とアメリカのスムート・ホーリー法
ブロック経済の拡大→世界市場のブロック化
- 2 アメリカによる一方的な日米通商条約の破棄
- 3 真珠湾攻撃は騙し討ちか？

米上院軍事外交合同委員会におけるマッカーサー証言

宣戰布告は絶対的な義務ではない！

7月23日には日本本土爆撃計画にサインしていた！

第2章 「対米英蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」

046

- 1 極東における米英蘭の根拠地を覆滅して自存自衛を確立する
- 2 蒋介石政権の屈伏＝汪兆銘・蒋介石連合政権の樹立
- 3 独伊と提携して先ず英の屈伏を図る

適時米海軍主力を誘致してこれを撃滅するに勉む

独伊と提携して日本がなすべきこと

独伊には次の施策を取らしめる

対英措置と並行して米の戦意を喪失せしむるに勉む

アメリカのシーレーン破壊に十分な潜水艦はあった

対支政策と国民党政権の屈伏

大問題の対ソ政策

ソ連と結び、米英と対決するための国家戦略なのか？

講和の機会、外交宣伝施策、講和の方式

下僚の作った作文に過ぎない？

「秋丸機関」の経済抗戦力調査

「腹案」の戦略は「英米合作経済抗戦力調査（其二）」に基づいていた
敵の戦略的弱点を突く」とによつてのみ、戦いに勝利することができる

第3章 実際的シミュレーションによる勝利の證明

087

I シミュレーションの前提

- 1 開戦時の艦船・航空機の戦力で日本はむしろ優勢だった

2 戰力は根拠地から戰場への距離の2乗に反比例する
太平洋は日本にとっての大きな武器であった

距離の原則の説明例としてのガダルカナル戦

石原莞爾中将のガダルカナル評

3 連合軍の輸送大動脈・インド洋

II 実際的なシミュレーション

1 極東における米英蘭根拠地を覆滅して自存自衛を確立（第1段作戦）
主要交通線を確保して、長期自給自足の態勢を整う

仮定シミュレーション——「腹案」を忠実に実行した場合

劣位思考から脱却してみると、こちらのほうがはるかに優れていた！

2 積極的措置に依り蔣政権の屈伏を促進（第2段作戦）

第11号作戦（西亜作戦／セイロン作戦）

敵は日本軍のインド洋攻撃を極度に恐れていた

第5号作戦（重慶地上侵攻作戦）

3 独伊と提携して先ず英の屈伏を図る（第2段作戦）
アメリカのソ連支援の大動脈としてのインド洋

4 米の繼戦意志を喪失せしむるに勉む

第4章

なぜ勝利の戦略が実現できなかつたのか

144

インド独立の可能性高まる

「対米英蘭蒋戦争終末促進」に関する「腹案」により戦争目的を達成できた！
もしも自分が参謀総長だったなら絶対負けなかつたろう——石原莞爾

山本長官は「腹案」の趣旨を理解してセイロン作戦を実行したのか？
今後採るべき戦争指導の大綱（第2段作戦／3月7日）
参謀本部・田中新一作戦部長の危機感

真珠湾攻撃の成功がすべてを狂わせた
連合艦隊と軍令部が対等になつてしまつた
真珠湾攻撃の戦術的勝利と戦略的敗北

アメリカに行つたからつてアメリカのことが分かるわけではない！
山本五十六スパイ説について

スパイ説や陰謀論は「思考停止」の決めつけである
山本五十六が戦略論を欠いていたことが本当の理由
「ガダルカナルに陸軍兵力5個師団を一挙投入すること」

補給のことを少しでも考えていていたのか？

陸軍はなぜ海軍に追随してしまったのか？

海軍の誇大戦果発表

誇大戦果発表の頂点――台湾沖航空戦

統帥権干犯問題

陸海軍の統帥権の分立に基本的な問題があつた
サイパンはなぜ簡単に陥落してしまったのか

「絶対国防圏強化構想」が決定したにもかかわらず

太平洋の島の防御作戦は陸海共同体制でのみ可能

第5章

秋丸機関と歴史の偽造

201

マルクス経済学者、統制経済学者ならダメなのか

「英米合作経済抗戦力調査」から「対英米蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」へ
「腹案」に沿つた戦いをすれば勝てた

杉山参謀総長が「国策に反するから全部焼却せよ」と言つた！？

ブルータス、お前もか！

もう一人ブルータスがいた！

「秋丸機関」のみが日本が勝てる道を示していた

20対1は俗論におもねつた付け足し

史実が出てきても捏造を続ける人たち

これがマスクミニの捏造報道だ！

学者は学問的良心を取り戻すべきだ！

『経済学者たちの日米開戦・秋丸機関「幻の報告書」の謎を解く』

有沢・秋丸が日本が勝てる戦略を打ち出したことは正しかつた！

おわりに

244

参考文献

250